



藤井 達也

図書への接近遭遇 ～ 今年は書庫に入ってみましょう!



以前にも書庫へ入る事をおススメしました。それは閲覧室よりはるかに多くの図書があるからです。しかし、ただ単に書庫に入るだけでは、あまりの多さに迷ってしまうでしょう。目的の図書が決まっているのなら、まずは閲覧室にある蔵書検索端末か、インターネットの本学図書館HPから蔵書検索のページに入って検索することが必要です。検索してヒットしたら、書名だけでなく配架場所や請求番号、登録番号も必ず控えておいて下さい。約48万冊もの中から目的の図書を探し出すには、これは絶対に必要となります。

もう既にご存知かと思いますが、図書には背にラベルが貼ってあります。そこには数字やアルファベットが記入されています。本学の図書ラベルは大きく分けて、青色が和漢書で赤色が洋書になっています。そして、そのラベルに書かれた数字(分類番号)の順番に図書は並べられています。同じ数字の場合には、その下のアルファベット順となっています。分類番号については本学の場合、和漢書は日本十進分類法(NDC)、洋書はデューイ十進分類法(DDC)を採用しています。

DDC(Dewey Decimal Classification)は、デューイ(Melvil Dewey, 1851-1931)が1876年に *A Classification and Subject Index for Cataloguing and Arranging the Books and Pamphlets of a Library* という小冊子の形で発表したのが初版です。現在は2003年に出版された第22版が最新版となっています。DDCは人間の知識を大きく1から9に分けて、百科事典のような広い分野を扱う物を0(総記)としました。そして以下同様に1から9を割り当てることで細分化し

て行きます。3桁目には123.4のように小数点を付す事になっていますが、これは見やすいための配慮であり、数学的な意味はありません。

一方のNDC(Nippon Decimal Classification)は、1929年に森清(1906-1990)が発表しました。最新版は1995年に出版された新訂9版となっています。現在では公共図書館を中心に、広く採用されています。十進法の階層構造はDDCに基づいているので、NDCの番号は一見するとDDCと同じ物に見えてしまいます。しかし実際には中身は大幅に異なっているので、注意が必要です。例えば「言語」を例にとると、DDCであれば400であるのに対して、NDCでは800といった具合です。

分類法はDDCやNDC以外にもアメリカ議会図書館分類法、コロン分類法、国際十進分類法等があり、それぞれに特徴があります。しかし司書課程を履修していない人が、分類法の詳細を学ぶ必要はありません。極端に言えば、自分が関心を持っている分野の分類番号が判ればよいのです。その番号をカウンターで聞けば、一番早いでしょう。

その番号を頼りに書庫へ入ってみて下さい。蔵書検索端末でも特定図書の前後の物は表示されますが、やはり書庫へ入ってみるのをおススメします。検索した本が期待していた物ではない事もあるでしょうし、その逆もあるでしょう。或いは、偶然に役立つ図書に出会うかも知れません。これは全くの偶然ではなく、書庫へ足を運んだからこそ出会ったので、必然の上に起こっていると言えるでしょう。分類番号は「知識の宝庫の道標」とも言える役割を果たしているのです。